
雨

きなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨

【Zコード】

N91111

【作者名】

きなこ

【あらすじ】

久しぶりに会った同級生

大雨だ。こんなに降るんだつたら折り畳み傘じゃなくて、もっと大きな普通の傘を持ってくればよかつた。

ちえ、と心の中で軽く舌打ちをしながら、横断歩道の青信号が点滅するのを眺める。

低い場所を求めて流れしていく水が、足元を流れていった。

「あ、えへへ、じゅん。」

不意に聞こえた声に、思わず持っていた買い物袋を取り落とす。

”バチヤン”

見事に水溜りの中に落っこちた。

「あーあ。」

私は情けない声を出して、買い物袋の酷い有様を睨んだ。続けて声をかけてきた男のほうも睨んだ。

「わあ怖い。そんな顔で睨まんといつてくださいよ。俺のせいかな？それ俺のせいかな？？」

よく見れば、男は森永だった。

「なんだ、ミルクチョコレートか。」

私のまともな第一声に、彼はまるでアカスジキンカメムシだーと言
われたときのよつた顔をしていた。

ちなみにアカスジキンカメムシは、大型のカメムシだ。そして更に
言うと、私が彼につけた最初のニックネームだ。

「なんだ、不満か？ チョコレートは嫌いか？」

アカスジキンカメムシよりは可愛らしいニックネームだと思つたん
だけどな。

「いや、不満とか、そりやーのじゃなくて、なんて言つが、
」

「なんだよ、ハツキリしろよ。」

「不満です。」

あまりに彼がハツキリ答えたので、私はちよつと不機嫌になつて、
もう既にビチョビチョになつた買い物袋を拾つて、彼に背を向けた。

「え、まじっすか。そこで黙るんですか。ごめんなさい、不満じゃ
無いです。ナントカカムシよりは好きです。」

「 アカスジキンカメムシも素敵よ。」

「あ、はい、アカジンギスカンカメムシも好きです。」

「…………ビードモいいよそんなの。」

「（えーーー）」

やつぱり傘は小さすぎた。雨粒は傘を伝わって私の服に染み込んでいく。

なかなか変わらない信号に苛々して、私はカメムシ（じゃなかつた森永）の方を振り返った。

「ねえ、信号が変わらないよ。」

彼はさつきと同じ位置に立っていた。でもさつきまでぞしていた紺色の傘を、今はたたんで手に持っている。

「ああ、わー。」

雨の音に消されてしまいそうな小さな声で、彼は返事をした。やる気も元気も覇氣も無い。さつきまでの、へラリとした笑顔もない。

買い物袋に入っている2リットルペットボトルで殴つてやろうかと思つたけれど、やめた。森永が泣きそうに見えたから。

「アカスジキンカメムシはあんまり臭くないんだよ。カメムシだけど。」

私の脳内では”慰めの言葉”というのが登録されていなくて、だからつに変なことを口走った。

森永はちょっと吃驚した顔をして、ちょっと笑つた。

「 そおか。 」

へラリ、と笑つた。

思えば私はこの笑い方がいつも気に食わなかつた。全部諦めたみたいな、それでいてまだ未練があるような、寂しげな笑い方。

「 ばーか。 」

なんとも言えない気分になつて、私は暴言を吐いて、また信号の方へ向き直つた。

赤いままの歩行者信号を眺めながら、彼にもいろいろあるんだろうなあと考えた。へラリと笑うカメムシ（ではなく森永）にも、いろいろと。

私は、いつも笑つていて皆からの信用もあつて面白い彼に憧れではいたけれど、なりたいとは思わなかつた。

むしろ頼まれたつて願い下げだ。それに、私は私のポジションに満足している。

「 ミルクチョコレートのポジションは嫌だな。 」

小さく呟いたつもりだったのに、彼にはちゃんと聞こえたらしい。「 そうだね。 」と寂しげな声が後ろから流れてきた。

雨水みたいに。

私はまた何か言いたくなつたけれど、できなかつた。

〇ーのお姉さんが歩行者用のボタンを押したから。そのとき初めてこの信号はボタンを押さないと変わらないことに気がついた。

「…………知つてた？」

一応聞いてみる。我ながら間抜けな声だと思つ。

「…………知つてたら押してる。」

森永も間抜けな声だつた。

2人で笑いながら横断歩道を渡つた。〇ーのお姉さんが変な顔をして「こっちを見てるけど気にならない。

「カメムシのポジション、森永ならいけると思つよ。」

私の脳内には”励ましの言葉”もインプットされていないから、私はまた変なことを口走つた。

でも彼はちゃんとへラリと笑つてくれた。

「やつか。」

雨が止みはじめた、気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9111/>

雨

2010年10月14日18時33分発行